

特別天然記念物「阿寒湖のマリモ」の保護活動

特別天然記念物「阿寒湖マリモ」保護会

会 長 蔵 根 弘 仁

会員数 200名

1. はじめに

マリモとは「学術的に世界的にも貴重な植物として大正10年（1921年）に国の天然記念物（後に特別天然記念物と改称）に指定された阿寒湖のマリモ（学名・緑藻Cladophora-Sauteri-Kiitzing シオグサ科）は、明治31年（1898年）に川上滝弥氏がその存在を報告して以来、宮部金吾博士（1917年）館脇操（1952年）その他多くの人達の調査研究がある。

マリモは、明治27年（1894年）に川上滝弥博士によって、阿寒湖のシリコマベツで発見され、マリモの名前は、北大の宮部金吾博士によって命名され、昭和27年に特別天然記念物となった。

マリモ祭の由来は、終戦直後頃からマリモが人々によって持ち帰られたり、枯死したマリモが多く見られ「このままでは、マリモがなくなってしまう」と心配する声が強くなり、昭和25年に阿寒湖マリモ愛護会、マリモ保護対策委員会、阿寒村阿寒国立公園観光協会、道教育委員会釧路国事務局は、「マリモよ湖水に還れ」と全国に呼びかけ昭和25年10月7～8日阿寒湖畔において第1回マリモ祭を主催した。

マリモ保護運動の盛り上がりの中から始まったマリモ祭りも現在では第38回目を迎えた。マリモの永遠を祈るアイヌの人々の古式ゆかしい儀式とマリモの眠る阿寒湖が美しく調和して、人々を幻想の世界へと誘う。このマリモ祭りは毎年10月8・9・10の3日間盛大に行なわれるようになった。

2. 活動の内容

マリモ保護活動は大別すると2つになる。

(1)マリモ保護事業

(2)マリモ保護思想普及事業

(1)マリモ保護事業

④生息地の視察と監視

春、夏、秋生息地視察を年4回ほど行ない、マリモが岸に打ち上げられていないかなど生息状況調べ、人の出入や車の出入はどうか（立入禁止区域）現地監視人（町教委委嘱・常駐・5～11月）との話を聞く、さらに打ち上げられるマリモを湖水に戻したり、水藻の除去作業等も行なったりする。

忘れられないのは、5～11月の7ヶ月間、施設不十分の監視舎でマリモ保護活動に従事する監視人の慰問激励である。夜の状況は住んでみないと実感できないと、熊、キツネ、鹿、フクロウ等多種の鳴き声を聞くが、一番恐しいのは人間だという。釣り人や動物の密猟者をいうのだろう。

⑤生息地に流れ込む河川汚濁対策。

生息地に流入する河川上流が木材の伐採、搬入のための林道造成で降雨による泥水の流入に注意をはらい、止むを得ない場合も早期復元を要請する。

尚上流には私有林（前田一步園財団）国有林があるが本年6月現地視察（財団、町教委、環境庁、保護会同行）をしたが、昭和57年台風被害のあとも見事に復旧され、泥水の流入の心配は今のところない。

⑥町教育委員会との連携を密にした保護体制の確立。

町教委としては将来的な保護、調査を北大黒木教授を中心として学術研究を含めて実施し、報告書等も出されている。保護会としては、この調査への協力をしている。

さらに阿寒湖畔公共下水道施設の早期完成を要請、幸い昨年より一部共用開始となりマリモ保護にハズミを得たと喜んでいる。なおこの下水道の全面完成は昭和66年度総工費90億円と聞き驚いている。

(2)マリモ保護思想の普及事業。

④小中学生への啓蒙

自分達の住む阿寒湖畔、この地に世界に類の少ない「マリモ」がある。これを保護し、少しでも多くの人達に知っていただき、見ていただくことに異論のあるはずはな

マリモの保存に会を

青年団体
「青宝会」OBらで設立準備会

今秋、阿寒湖に二万個以上のマリモが打ち上げられるのを改めてマリモ保護対策がクローズアップされているが、阿寒湖の青年団体「青宝会」OBが中心となって「マリモ保存会」を設立し、湖畔住民みんなでマリモを保護して、こうという運動が進められている。二日には同保存会設立準備会が開かれ、今後マリモが生態として

いる湖畔の清掃や監視など積極的な活動に乗り出すことを決めた。国の特別天然記念物に指定されているマリモは、阿寒湖の重要な観光資源にもなっているが、数十年前に人の糞尿が相ついたり、台風などたまたま湖畔に打ち寄せられるなどの被害を受けている。最近では十月十日、チュウライ湖岸のマリモ保護のためのコルナートパイプを撤去した部分に二万個以上も打ち上げられた。この時は町教委の職員が懸命にマリモを湖に戻し、被害はなかったが、改めてマリモ保護対策がクローズアップされることになった。こうした中で、湖畔の青年団体「青宝会」OBの蔵根弘人さん（こらは、自分たちの手でマリモを守り、子供たちにも保護意識を伝える

よう）と同保存会を設立することでになり二日、その設立準備会が開かれた。これまでもマリモを守ろうという団体はあったが、いつのまにか有名無実のものとなっていただけに、同準備会では「住民みんなでしっかりした組織に育てよう」と誓い合った。

同保存会の主な活動内容は、湖畔の清掃など生息地の手入れと、生息地が移動していかないかどうかを定期的な監視、また方が一、マリモが湖畔に打ち寄せられた場合、町教委の指導でマリモを湖に戻す作業に協力することとしている。

マリモ保護は地元から

保護会の
設立総会
会長に蔵根さん選出

S 54.6.3付

【阿寒】阿寒湖に眠るマリモの保
護は地元からと、このほど発足
したマリモ保護会の設立総会が行
われた。

その後、昭和三十九年六月に全
町的な組織としてマリモ保存会が
結成され、マリモ保護思想の普及
はじめ学術調査研究、マリモの湖
岸打ち上げ防止対策への協力など
を行って来た。しかし、同保存会
の自主事業のマリモ祭りや観光協

会の主催となったことから、同保
存会の活動も次第に活発になり、有
無事で自然消滅した形になってい
た。

とてつが、最近、湖畔の著者た
ちも組織している青宝会（石丸雅
司会長）が中心となり「このまま
では地元の救済であるマリモの保
護が心配だ。地域をあげて保護活

動を再開するとともに、多大な恩
恵を受けているマリモをもう一度
見直そう」という声が高まり、こ
の日の設立総会となったもの
だ。



が出席し、同保護会の会則などに
ついて審議したあと投票を通過し、
会長に蔵根弘人さん、副会長に若
淵隆次さん、市原徳治さんを選
出された。

い。小中学生も同じである。

北海道新聞 S 53.12.4付

昭和54年9月に地元小学生4年以上と釧路市内小学生にマリモについてのアンケートをしてみると

- ・マリモは大切にしなければならぬ。
- ・マリモを調べたい、知りたい 45% 99%

となった。

そこで地元小中学校へ「マリモができるまで」のパネルを説明板展示した。その後、地元の方より大きなパネル説明板が寄贈され、活用されている。

㊦小中学生の実践活動

小学生はグリーンクラブが結成され、湖畔地域のクリーン作戦（清掃活動）や登山清掃が行なわれ、中学生は湖岸や市街地河川の清掃活動が毎年実施され、マリモ保護の一翼を荷っている。

㊧パンフレットの作製配布による啓蒙

保護会としてはマリモについてのパンフレットを作製し配布するが大変好評であり、その他にステッカー、絵葉書も作製し、観光客へホテルフロント等で無料サービスし喜ばれている。

㊨シンボルマークの選定

昭和56年7月に保護会のシンボルマーク、標語の全国募集を行ない、マーク621点、標語2,850点の応募、最優秀賞作品は現在も使用している。

㊩無リン洗剤の使用呼びかけ

下水道が完成するまでは、無リン洗剤を使用してほしいと家庭やホテル等の事業者への協力要請を3ヶ年ほど継続したチラシを作製して各戸に配布し、小売店へも取り扱わないよう協力要請をした。

㊪「マリモの歌」と啓蒙運動

水面をわたる……………ではじまる歌は多くの人々に親しまれ、口ずさまれて、マリモを全国的に知らしめる大きな役割りを果たしたが、この歌がいつだれの作詩、作曲で歌手は誰れか不明であった。



作詞家 岩瀬 ひろし 初代歌手 安藤 まり子さん
 作曲家 八洲 秀章(死亡) 歌 手 九条 万里子さん



安藤 まり子さん
 九条 万里子さん



第33回マリモ祭りを機に「マリモの歌30周年記念特別公演と名打って実施した。

作 詞 岩瀬ひろし氏

作 曲 八洲 秀章氏(後死亡)

初代 歌手 安藤まり子さん

二代目歌手 九条万里子さん

当時、関係者が元気で活躍されており、盛会裡に公演が終了した。

後日お礼の便りに共通していたのは「マリモの歌」のことは忘れかけていたが、発表会に出席し仕事冥利に尽るとあり、特に八洲先生は昨年なくなり、あのステージが最後であったことを考え合せ、「マリモの歌」のいつまでも歌い継がれることと、マリモの保護への思いを後世に伝え、ご冥福を祈りたい。

3. 活動の成果

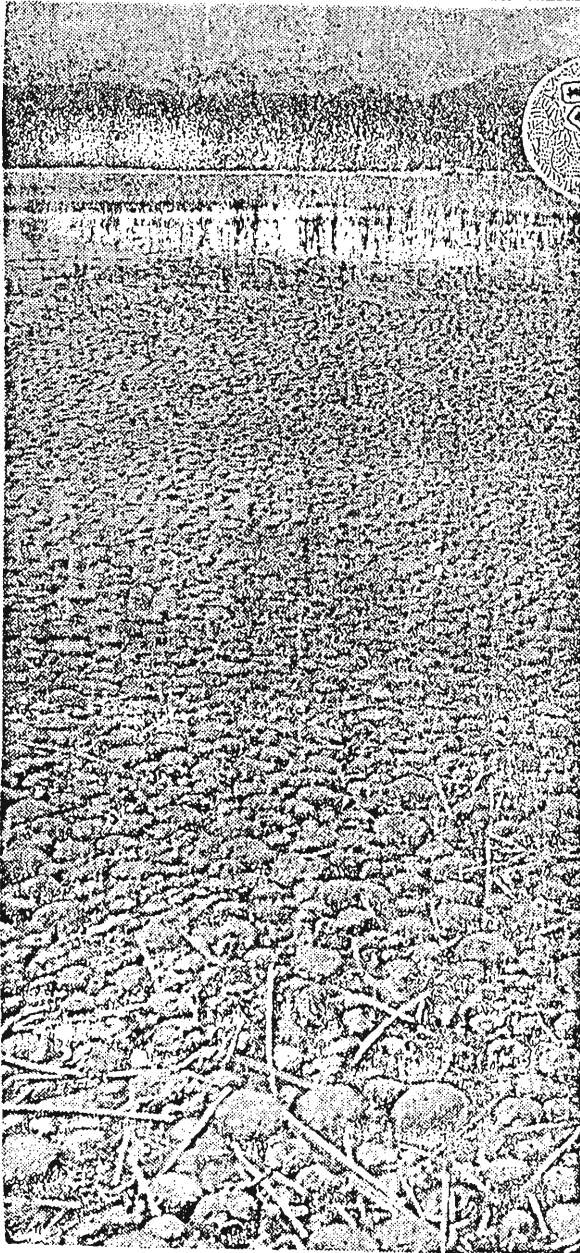
マリモは湖底にあり、常に手にして見ることはできない。死滅の危機にさらされているとか、マリモか電灯かとさわがれた時期もある。しかし国の特別天然記念物として後世に引き継がなくてはならないことを認識し、ささやかな保護活動であるが努力していかなくてはならない。現実には保護会の願いと裏腹にマリモの全体量半減の知らせもある。

マリモは、その生成の経緯や環境との関係に長年の調査研究を重ねても未知の部分が多く、神秘のベールに包まれている。

保護会を中心とする活動を通じ、マリモの現況を多くの人に理解していただき、環境の維持に努力していきたい。

特に観光客への啓蒙とマリモ保護への協力を要請していきたい。

幸い活動資金の不足を阿寒国立公園管理事務所・成田さんの助言で公益信託 TAKARA ハーモニーファンドより助成を受け、活動強化への大きな励みであり、責任の重大さを再認識しているものである。



マリモ
(阿曇湖)

死滅の危機に

日本各地に分布するマリモは、その独特の生態と景観から、自然遺産として保護されるべきものである。しかし、近年、その生息地である阿曇湖のマリモは、急激に減少している。その原因は、湖の水質汚染、水位変動、そして人為的な干渉によるものである。

阿曇湖のマリモは、湖底に生息する藻類の塊体であり、その形成には長い年月がかかる。しかし、湖の水質が酸性化したり、栄養塩のバランスが崩れたりすると、マリモの生育が阻害される。また、湖の水位が変動すると、マリモが干上がったり、沈没したりして死滅してしまう。

マリモの減少は、阿曇湖の生態系に深刻な影響を及ぼしている。マリモは、湖の水質を浄化する働きがあり、また、多くの水生生物の棲息地となっている。マリモが死滅すると、湖の水質が悪化し、生物多様性が失われる危険がある。

マリモの死滅を防ぐためには、湖の水質を改善し、水位を安定させる必要がある。また、人為的な干渉を減らし、マリモの自然な生育環境を保全することも重要である。政府や自治体、そして市民の協力による取り組みが、マリモの生存を確保するために不可欠である。

マリモの減少は、自然遺産としての価値を失ってしまう。我々が自然を愛護し、環境を保全する責任がある。マリモの死滅を防ぐために、今すぐ行動を起こそう。

現在マリモに関する資料収集を行なっていますので、好評を得て作製しているテレホンカード販売による益金とあわせて活用し、充実した資料にしたいと考えています。

最後に阿寒町のシンボル「マリモ」はここに生活する者の誇りでもあり、これを保護することが未来への大きな遺産でもあります。

ささやかな活動ではあるが、保護会の活動の充実を期し、関係機関と十分連携しながら役目を果していきたい。